

書評

青木省三 著

こころの病を診るということ

私の伝えたい精神科診療の基本

松崎朝樹

こころに問題を抱える者を前にして、我々はどうのように診療に当たっているだろうか。明確な項目や基準が挙げられた診断基準の使用が普及しつつあり、さまざまな精神障害に対する治療のガイドラインも作成されていることからすれば、すべきことは明確になったようにみえる。しかし、精神科の医療のすべてが明確になったわけではない。精神医学で扱われるものが人のこころや人生である以上、そこには人間的な理解やかかわりが必要とされ、アルゴリズムやガイドラインに書かれていることなどは実際に必要となる精神科の臨床の一部でしかない。では、精神科に関わる医療者の正しいあり方とはどのようなものだろうか……そんな精神医学における不明確な点をどう理解し、どう対応すべきか、それが語られたのがこの本である。

解説は実際の臨床に沿って始められる。初めて精神科の病院を訪れた者に対してどのように話を始めるべきか、診療情報提供書や問診票を手にも何を感じるべきか、患者の様子から何をを知ることができるのかなど、情報をどう拾い上げ、その精神障害や人物、人生をどう理解し、どう診断を下し、その診断とどう向き合うべきだろうか。診断を下した後、患者と関係を作り、維持し、治療に関わる中、さまざまな言葉や薬を手にも、どのように寄り添い、回復へと導き、その方向を見定めるべきだろうか。さらには患者の中には怒る人もいれば、自殺を試みる人もいれば、話が止まらない人もいるが、どのように対処すべきだろうか。そのような実臨床におけるさまざまな物事につき、ときにきわめて細やかに、ときに

大局的な視点から理解を助けるよう、あるときには非常に理論的に、あるときには非常に具体的に語られている。

精神医療の正しいあり方につき語られる上で、個人的な考えが語られるだけであったり、学問ばかりで血の通わぬものだったりするようではいけない。先輩の背中を見ながら時間をかけて独自に体得してきた者も多いとは思われるが、正しい理論に基づいたことを学ぶ機会は限られる。そんな中、豊富な臨床経験を積みながら、同時に精神医学に学問として向き合ってきた筆者だからこそ書けたこの本は大きな助けとなるであろう。さまざまな状態や障害、さまざまな局面の症例が挙げられる中、丁寧に書かれた解説は、まるで青木先生の外来に陪席し、病棟での診察に同行しながら解説を受けているかのような。そこから臨床に生かせるアイデアや考え方について学べることは多く、迷ったとき、困ったとき、臨床家としてさらに一步前へと進みたいときに何らかの答えを与えてくれることだろう。

新しく精神科医として学び始めた者にとっては良い教科書となり、もうすでに精神科医として経験を積んできた人にとってもあらためて患者との関わり方を今一度見直す良い機会が得られる一冊といえよう。

(筑波大学・精神神経科)

●A5 296 頁 2017 年 04 月 定価：本体 3,000 円＋税 医学書院刊